

E 62

204
427

宗祖降誕
開宗紀元

寶龜五年甲寅六月十五日
千〇九十二年

弘法大師

高野入定
定後曆數

承和二年乙卯三月廿一日
千〇六十四年



宗祖降誕會

稽首歸命第八祖

弘法利人大日化

報謝大海一滴恩

願我智行悉同彼

特47
857

序

夫れ弘法大師は内に驚峯親聽の實徳を繼んで外に馬臺凡庸の相貌を示し。佛前に願を發して大乘無上の法要を祈請し。桓武の朝廷曆の末年。命を銜んで入唐し。青龍寺の慧果和尚に遇ひ奉りて。兩部瑜伽の祕法を禀承し。一百餘部の密藏を請求して。大同元年本邦に歸朝し給ふ。爾來日東新たに除暗遍明の光輝を掲げ。扶桑普く即身頓悟の教風を扇ぐ。國家を鎮護し黎元を利濟すること。單へに密教流傳の勳。大師傳燈の賜にあらざるは莫し。是を以て毎歲降誕の聖日を迎へ。末徒等法要を修するありと雖も。未だ以て此偉人の生誕日をして。國民全體に印銘せしむるに到らず。我等茲に感ずる所あり。自今大に全國民



をして「いろは」の創作者。吾邦文化の開拓者たる大師の洪徳を記憶せしめんと企圖し。今歳始めて全國同志の協力を得。京都眞言宗總本山東寺に於て。盛大森嚴なる高祖の降誕會を舉行するの運に到れり。何んの幸か之れに加へん。今後年歳を重ねるに従ひ。益々盛大に此聖日を祝し奉らんとす。本書は唯だ明治三十一年今月今日のしるしとして。茲に萬衆に願つ者なり願くは祖徳を須彌よりも高く。御名を四海の廣きに達せしめむ

明治三十一年六月十五日

西都東寺の塔下にしるす

石堂慧猛

弘法大師

盛りの花は散り易く
 豊聴耳の聲より
 靈鷲の峰の月の影
 都も鄙もおしなべて
 奈良の都の世となりて
 いよくふかくなるまゝに
 財を貪る料となり
 たゞよふ沙門敷ふて
 迷の暗におははれて

文學士 藤岡勝二

茂る梢に蔭多し
 我日の本に照りそめし
 代々に光をましそへつ
 あふがぬものもなかりしが
 朝の眷遇野の歸服
 寺塔はひなしく塵俗の
 勝他名利の浮雲に
 出離生死の大道は
 あやめもわかずなりにけり

唯はのかにもたのもしき
寶龜五年の六月に
佐伯田公の其もとに
幼名眞魚と申し、が
二九の齡に天さかる
園もなければ法の道
都の空は定めなく
てる月影やあるらんと
門におどつれまのあたり
道俗五濁に陥りて
佛の道は今もなほ
四國をさして出で玉ひ

光り見ねける光仁の
玉藻よるてふ屏風が浦
空海法師はあれましき
學問修業の念深く
鄙には文の花にはふ
たどるしるべもなきまゝに
たよふ雲の間にも
奈良石淵の勤操の
虚空藏聞持法をうけ
名聞利養につとむれど
行く人々を待ちけりと
あるは大瀧嶽に入り

霞こめたる奥山に
あるは室戸の崎に出で
亂るゝ思ひをしづめつゝ
愛別離苦にくるしめる
膚つんざく寒風も
はらさん爲にいとひなく
ふみ行く跡に徳をしき
横の尾寺の勤操が
うけて其名を空海と
三乗十二部經はみな
解くには足らず願はくは
我にまたなき御教を

精進求道の意をかため
浪うちかへす荒磯に
いばらまつはる衣手も
有情を撫でんその爲に
煩惱業繫の迷雲を
向ふ野山に行を練り
あまねく諸國を經歷りて
許に歸りて沙彌戒を
改めましき其時に
いまだ心の疑ひを
十方三世の諸佛たち
授け玉へと祈られき

この誓願のしるしにや
大和の高市郡なる
中に大毘盧遮那經の
果して求め得られたり
懸記にもれず大聖の
開き玉ひし始めなる
すゝみてつとめ玉ひしが
儒佛道教各別に
差別はあれを旨は皆
いづれの道によるども
いと麗はしき筆を以て
かくて大師の徳望は

或時靈夢の告により
久米道場の塔柱の
ありと知られて尋ねしに
これぞ善無畏三藏が
眞言祕密の法門を
これより深く其道に
三教指歸を著はして
門を分ちて淺深の
衆生利濟の外ならず
終に利益はあるなりと
寛き心を示されき
上にきこえて延暦の

二十三年七月に
其冬唐の長安に
あまねく尋ね玉ひしが
三朝天子の師となりて
きゝておどつれ玉ひしが
我は汝を待つ久し
付屬すべきを速やかに
親しく大師を迎へたり
傳へて遍照金剛と
授け玉ひて其師走
多生の間密藏を
今我正に願足りぬ

入唐の儀を勅許あり
到りて高僧碩徳を
青龍寺なる慧果阿闍梨
いともたふどきひじりそと
阿闍梨大に喜びて
命の内は我法を
灌頂壇に入るべしと
こゝに兩部の曼荼羅を
號けて阿闍梨の位をそ
示寂し玉ふ其時に
弘めんとこそ願ひしが
吾は東土に生れ出で

汝を待たん久しくな
されば其後天竺の
諸高僧に遇ひて
究め傍ら悉曇の
韓方明に學び得て
いよくあつくなりしがと
大同元年十月
これより博多嚴島
月日を越えて和泉なる
藥子の亂のをさまりし
國家治安の爲にとて
仁王經の大法を

留りそとぞ遺されし
般若牟尼室利波羅門の
親しく諸教の蘊奥を
學をもつたへ書道さへ
憲宗帝の御覺
といひる袖をふりはらひ
筑紫へ歸り玉へりき
所々に渡りて一年の
禰の尾寺に歸り來て
その明る月高雄にて
弘仁帝の勅により
修してますます眞言の

妙旨を發揮し玉ひき
一切諸法の智を領し
萬有通具の理を示す
心の相はかはれども
有情の體はあるなれど
皆毘盧舍那の德にして
攝歸せらるゝものなれば
眞如法性そのまゝの
七宗無數の學徒等も
灌頂受學を乞ひければ
暇もなきをなげさつゝ
高野の山に道場を

金剛不壞の覺體は
不生不滅の實相は
迷悟染淨くさぐさに
人天鬼畜いろくくに
六大具足の萬法は
金胎兩部の大日に
大日所説の密教は
みのりなるぞと教へしに
踵をうぎて參集し
靜慮を凝し玉ふべき
都を出で、紀伊の國
建て、しづかに傳法の

基を定め玉ひけり
抗争しげくありければ
八州かけて巡錫し
入りて鎮護の法を修し
波風立たずなりぬらん
心の海に大日の
まだひら雲ははれざれど
あふぎて道俗もろどもに
なびかぬものはあらざりき
東大寺にぞ御幸して
天長元年天が下
大師祈禱の功力にて

時しも南都北嶺の
また東路に出で玉ひ
ことに二荒の山深く
都の空は今にはや
いでや歸りて鏡なす
影やとさんとかへりしに
大師修法の高徳を
風にふきしく草のごと
上皇并に帝さへ
大師に灌頂うけ玉ふ
早つゝいさし其時も
天も甘露のうるほひを

ふらし玉ひけるとかや
最澄示寂の其後は
光りかゝやき三密の
あらはれけるこそめでたけれ
遺訓のまゝを傳へ卒へ
二十一日高野山
此世の縁を絶ち玉ふ
弘法大師と謚號を
千年あまりを隔てぬる
津々浦々に至るまで
なきこそいといたふとけれ

げに佛法の大海に
大師遍照金剛の
業用いよくあらたかに
ここに慧果阿闍梨耶の
承和二年春三月
奥の院にぞ坐禪して
その後醍醐天皇は
下し玉ひき世下りて
今日もやまどの國のはて
大師てふ名をしらぬもの
なきこそいといたふとけれ

弘法大師傳

此傳記は大師に親しく近侍し奉りし、十大弟子の隨一眞濟大德が、高祖入定の御歲即ち承和二年の十月二日に書かれし者なり。大師の傳記は汗牛背たならざるも、此傳記はど舊るくして信憑すべき者あること莫し。此度高野山に在りしものを取り寄せ、元と漢文なりしも、諸人をして讀み易からしめんが爲めに、今體文に直し平假名を附したり。然れども成るべく原文を失せざるに努めたり。讀者幸に諒とせよ

勢 外 謹 識

和上故の大僧都諱は空海、灌頂の號を遍照金剛と曰ふ。俗姓は佐伯の直、讃岐の國多度郡の人なり。其源天尊より出づ、次祖昔し日本武の尊に従ひ、毛人を征して功あり、因て土地を給はつて便ち之に家す。國史譜牒明著なり。相ひ續で縣令と爲る。和上生れて聰明、能く人事を識る、五六歳の後ち隣里の間神童と號す。年始めて十五にして、外舅

二千石阿刀の大足に隨ひ、論語孝經及び史傳等を受く、兼ねて文章を學ぶ、入京の時大學に遊び、直講の味酒淨成に就き、毛詩尚書を讀み、左氏春秋を岡田博士に問ふ。博く經史を覽て殊に佛經を好む、常に謂へらく我が習ふ所は古人の糟粕なり、目前にして尙は益なし、況や身斃れての後ち、此陰已に朽ちなん、如かず眞を仰がんにはど、因て三教指歸三卷を作りて優婆塞と成る、名山絶巖の處、石壁孤岸の奥、超然として獨り往き淹留苦練す、或は阿波大瀧の峯に上つて修念すれば、虚空藏の大劍飛び來つて菩薩の靈應を標し、或は土佐室戸の崎に於て目を閉ぢて觀すれば、明星口に入つて佛力の奇異を現す、其の苦節や則ち嚴冬の大雪には葛納を着て顯露道を行き、炎夏の極熱には穀粒を絶ちて日夕懺悔す、二十の年に及ぶ頃、剃髮して沙彌の戒を受け、佛像に對して誓て曰く我れ佛道に入りて常に要を知らんことを求む、三乘五乘十二部經、心裏に疑あり、未だ以て決を爲さず、仰ぎ願くは諸佛我に至極を示し給へど一心に祈請するに、夢に人あり曰く大毘盧遮那經是れ汝が求むる所なりと、乃ち覺悟して歡喜す、一部を求め得て帙

を披て遍く覽るに、凡情滯あり質し問ふ所なし、更に發願を爲して入唐學習す、天至情に感じて、去じ延曆末の年命を銜んで渡海す、即ち上都長安青龍寺の内供奉大德慧果阿闍梨に遇て、五部の灌頂に沐し、胎藏金剛界兩部祕奥の法を學び、及び毘盧遮那金剛頂等二百餘卷の經、并びに諸新譯經論を賚らし、唐梵兩ながら得たり、大同二年を以て我が上國に歸る、此より已降帝四朝を経て、國家の爲めに壇を建て法を修すること五十一度、風を息め雨を降らし靈驗其數あり、上一人より下四民に至るまで、灌頂を授けらる者、蓋し數萬人なり、灌頂の風我が師より始まり、眞言の教此時に立つ。

夫れ師々相ひ授け嫡々傳來する者、高祖大毘盧遮那如來金剛薩埵に授け、薩埵龍猛菩薩に傳へ、龍猛菩薩より下も大唐玄宗肅宗代宗三朝灌頂國師特進試鴻臚卿大興善寺三藏大廣智不空阿闍梨に至るまで六葉なり、慧果は則ち其上足の法化なり、凡そ計るに付法、和上に至るまで相ひ傳へて八代なり、和上の記に曰く彼の阿闍梨の曰く我が命將さに盡きんとす、汝を待つこと已に久し、今果して來る吾が道東せむ。故に吳殷纂に云く今日

本の沙門あり來つて聖教を求む、皆學ぶ所瀉瓶の如し云云。又去んじ弘仁七年紀の國南山を表請して、殊に入定の處と爲す、一兩の草庵を作り、高雄の舊居を去て、移つて南山に入る、其峯絶遠にして遙に人煙を隔つ、和上住するの時頻りに明神の衛護あり、常に門人に語らく、吾が性山水に狎れて人事に疎かなり、亦是れ浮雲の人、年を送て終を待つこと必ず此窟の東たり、太上皇勅あり、請下して中務を安置す、供養すること月餘、亦高雄に居す。天長皇帝の即位に少僧都に任ず、再三辭讓すれども免れずして公に在り世事隙なしと云ふと雖も、春秋の間必ず一び往て其山を見る、中路の邊に女神あり、名けて丹生津媛と云ふ、其社の廻りに十頃許りの澤あり、若し人到り突けば即時に傷害せらる、和上登るの日、託宣に曰く、妾神道に在て威福を望むこと久し、菩薩此山に到る弟子の幸なり、冀くは己が私苑を獻じて、表するに信情を以てす、今見るに開田二三町許り、常の庄と名づくる者は是れなり、惟みるに始あれば終あり、故に古來の賢聖皆な從て零落す、大師天長九年三月十二日より、深く世味を厭ふて常に坐禪を務む、弟子進で

曰く、老者は唯だ飲食す、此れ亦穩眠にあらす、今日に然らず何事か之れ有らむ、報じて曰く命や涯りあり強て留むべからず、唯盡期を待つ、若し時の至ることを知らば先きに在て山に入らむ、承和元年五月晦日弟子等を召請して語らく、生期今幾ならず、汝等好く住して佛法を慎み守れ、我れ永く山に歸らむ、九月の初めに自ら葬處を定む、二年正月より以來た水漿を却絶す、或人之を諫めて曰く、此身腐ち易し更らに屍を以て養を爲す可し、三月二十一日後夜に至り右脇滅を唱ふ、諸の弟子等一二の者搖病なることを悟る、遺教に依て東の峯に歛め奉る。生年六十二、夏臘四十一、其間勅使手ら諸の怪異を詔す、弟子左右に列りて相ひ持つ、賦者作事及び遺記を書す、其の間哀んで送る狀更らに一二ならず、亡名の僧述ぶ

承和二年十月二日

弘法大師理想の片影

傳燈記者 石堂 慧 猛

佛教の深嶺高嶽に攀ち登りて眞如の明月を觀んと欲し、渺茫淼漫たる佛教海に棹して彼岸に到らんと企圖せし者、佛滅後三千年の今日に至る迄、ソレ眞に幾億萬人ぞや。而して其中途に止り化城に憩ふて遂に能く其目的地に達せずして已みし者亦眞に測る可らずと爲す。嗟呼佛教の大海や津涯を知る可らず、層巒疊嶂容易に其頂嶺に達するを得ず。想ふに從來佛教を稱賛せし者も將た之れを誹毀せし者も、衆盲觸象の馱評に過ぎざりし者殆ど爾り。誰れか能く一大新見地を發見して、老比丘釋迦が八十年間に説きし、八萬四千の契經を一束三文に評價し去り、「三乘十二部經心神疑あり」と喝破し、眞理の極致を從來所傳の佛教已外に覺めんとしたる大勇銳者は、吾人は唯だ吾邦の弘法大師に於て之を見るのみ。

夫れ眞言宗は元と印度支那より轉傳せし者なりと雖も、建設的に眞言宗を立て、教相判釋以て宗義の立脚地を確定し、祕密乘教を大成せし者は、實に我邦の弘法大師なりとす、而して今弘法大師の世界觀は果して如何と云ふに、唯心論にもあらず、唯物論にもあらず、即ち物心圓融の六大(地水火風空識)の事法を以て、宇宙の本體眞正の實在と爲す。未だ曾て微塵許りも理性を本とする事を談せず。復吾人の心内心外に於て不可思議的「ビインク」の存在を許さず。世間萬般の現象其者の外に、何等の預定、何等の假定をも有せず。生滅變化の俗諦をば、直ちに眞諦の極致と確認す是れ即ち無畏三藏の大日經疏に「即レ事_ニ而_モ眞_{ナリ}」と云ひ、又「世諦即_チ是_レ第一義諦_{ナリ}」といふ所以にして、現象の事體は本來實在にして、而も其外に實體を求めず。是を以て大師の世界觀は、顯教所談の離言的稍極的には似ず、常に積極的肯定的に出づる所以。五感の對象たる現象其者に眞理の本際を認め、世間の事相を離れ、若くは事體の奥裡に空理眞如を求むるの要なく、宇宙萬有は皆な悉く六大の中に該攝網羅せらるゝが故に、現象即ち實體にして、事法差別の當相、即ち是れ一切諸

法の本住體性なり。六大の在る處萬法學つて本有實在にして、而も此の六大は互に無礙圓融するが故に、一塵一法は各自に宇宙大の萬徳を具有す、大師は之を「一塵一法皆是法界體」と云へり、吾人は曾て大師の世界觀を論じて左の如く言ひし事あり。

「物心の二法を以て萬有の本體と爲すが故に一元論にもあらず、物心の二と雖も其物に五大を含有するが故に二元論にもあらず、強ひて之を云へば多元論と云ふべきが、然れ共其六大なる者は相互ひに周遍的の者にして、五大を一元に攝盡し、一元を餘の五大に開展するを以て、世の原素論者極微論者の如き意味に於ての多元論にあらず、又一元論と稱するも妨げざる所の多元論なり、況んや密教は老子の一道分出論の如き、或は基督教の天地創造論の如き亦或は顯教所談の唯識眞如の兩縁起論の如きは、毫も認めざる所にしてプレートトの「實在」デカルトの「認識」印度吠檀多派の「ブライマン」シヨーペンハウエルの「意志」、基督教の「上帝」、顯教所談の「眞如」の如きは、悉く是れ六大の中の識大の一部、或は四曼の中の法曼陀羅に屬する者にして、決して萬有の本體全部を覺了したる者と認

めず。蓋し萬有の性相は悉く本有常住なる者にして、決して緣起分出の者にあらず、六大の實體は恰も日月の如く萬般の現象は其光明の如く、光明を離れて日月は求む可らず現象即ち實體なり、吾人は強ひて之に向つて現象の名を下すを要せず、唯夫れ本體のみ唯夫れ實性のみと謂はん何となれば萬象悉くア字本不生にして、十界の差相皆是れ真相なればなり、山自ら靜に水自ら流れて本有實相なり、柳は綠花は紅其儘にして極致なり」云云ソレ斯くの如く大師の眼底には現象悉く實體。事相即ち實相なり、理想に泥んで現實を忘るゝは大師の尤も忌む所、是を以て大師は理想を理想とし觀念を觀念として獨り存せしめず、直ちに藝術と爲りて美と顯はれ行爲に彰はれて善と爲り、理性の上に眞を觀し、以て社會國家及び個人を教誘す、大師は獨り現實界を理想化するのみならず理想を直ちに現實に附す、是れ大師獨特の大本領なり、其社會的事業に於て、其國家的事業に於て、此處に學校を設け、彼處に施藥院を立て、池塘を廻りて萬民を救ひ橋梁を架して交通を便にし、而して惟へらく是れ佛作佛業なりと、或は文筆を弄して直ちに之れに自家の理想を寓

し、斯民に教ふる「イロハ」に涅槃經四句の意義を含ましめ、四國順拜の便を開いて貪瞋痴慢の四煩惱を對治するの意を寓し、八十八ヶ所を設けて、見惑八十八使の煩惱を斷滅するの意を附する等、其一舉手一投足に於て悉く理想を發現せざるは莫し、然り而して復自家の觀念よりして客觀界に對するや、亦悉く之れを理想化し去る、萬象に其美を觀るや明月が半宵寂かに露葉を照らして輝々たる光あらしむるが如く、宇宙萬般の事相を極美的に化し清淨的に變じ、高峯に響く松風を聞いては、法身說法の妙音と觀し、池水に寫る月影を見ては凡身即佛の相を得たりと爲す、六塵を以て悉く吾人に或意義を教ふる所の文字なりとし、教法の本體を書籍のみに置か、六塵を以て悉く教體なりと爲せり、是を以て人事を觀察するや、凡て道德的意義ある者として「ウォルツウナルス」の詩想の如く、悉く之を向上的に變じ道德的に化す、已に萬事に道德的意義を認むるを以て、其世間道德的を輕視せずして直ちに是れ出世間的道德なりと達見するは無論の所なり、吾人は今茲に變じ化すると云ふ語を用ひたれ其元とは適當なる言辭にあらず、寧ろ大師は

宇宙其自からが道德的計畫美術的構成なるを看破すると云ふを以て適切なりとす、故を以て若し人あり大師が主張せし秘教の眞月を觀察せんと欲せば、少なく其詩人的觀察と哲學的思索と宗教的冥契の三坂より攀ぢ登らざるべからず。況んや怪疑的批評的を以てしては到底其片影をも捕ふる事能はざるべし、蓋し大師の理想は決して萬有に一定の理法あることを否定する者にあらず、又決して因果の關係を無視する者にもあらず、差別不完全の現象は、悉く其圓滿平等の本體本有（即ち六大體性）が且く必然の理法（因果の法則）に従つて千變萬化の片影を印現する者と看破するを以て、吾人が其不完全不調和醜穢の現象と認むる所の者を以て、直ちに完全調和極美の實體と爲す、何となれば事相變化の現象界を離れて、更らに不變の實在を求むべき者なければなり、然り而して萬象の統一を即ち本有本不生に之れを求むるを以て、差別的なると同時に平等的に達し、個體的なると同時に亦普遍的なり、差別即ち平等平等即ち差別一多相融即離不謬の妙境是れ之れを稱して即事而眞と云ふ

而して復眞理正善智識道德純美の完全調和を圓滿と稱し、之れに人格を賦して圓滿法身と云ふ、然れ共是れ決して自己を離れて他に存する者にあらず、即ち自心の本體相用なれば、之れを覺知するを如實知自心とは稱するなり、蓋し吾人心性の發達とは、要するに自己を覺知する事に在り、言ひ換ふれば自己の範圍の擴張せらるゝ事に外ならずとせば、五尺の自我を擴大して没我に至らしめ、此頃我邦の學者間に唱導せらるゝ所謂國家我より、社會我に進み、遂に無我の大我に達するに至つて、能く自心の全量を覺了したる者と謂ふべし、大日經の教理大師の理想は、正さに此に在つて存せり。嗟呼大師の一大理想たる即事而眞は、恰も大空の萬象を包容するが如く、大海の百川を吞吐するが如く、各教各派を吸収し、一切萬法を攝盡して餘蘊なし。偉大なる哉空海の胸量、高遠なる哉大師の理想。

遺韻

贈

弘法大師

蒼嶺白雲觀念人。等閑絕却草行真。心遊佛會不遊筆。不顧揚波亦
 許春。豈謂明皇交染翰。鵝頭龍爪爲君陳。祥雲濃淡御邸出。瑞草秋
 冬感帝仁。青山翠岳見翔鳳。花苑瓊林望走麟。更有懸針與倒韭。切
 思相伴竭丹宸。龍管臨池調漆墨。烏光忽照點豪賓。暴風驟雨莫來
 汗。此是君王所愛珍。松巖數霧菴中濕。恐汗望晴經月旬。畫虎畫龍
 都不似。心寒心暑幾逡巡。

答

嵯峨天皇

深山居住振奇名。冰玉顏容心轉清。世上草書言爲聖。天縱不謝張
 伯英。暫乘雲嶺一念隙。書得綾羅四帖屏。初見筆勢鸞鳳體。情看墨
 妙虬龍形。高岑墜石未動地。絕澗長松豈揚聲。亂點忽疑舞鶴起。赴
 湘連似旅雁行。花苑正開春日色。月天遍照秋夜明。對之觀者目眩
 曜。共稱草書笑丹青。絕妙藝能不可測。二王沒後此僧生。既知風骨
 無三人擬。收置祕府最開情。

贈

嵯峨天皇

閑僧久住雲中嶺。遙想淡山春尚寒。松柏料知甚靜默。煙霞不解幾
 年殘。禪關近日消息斷。京邑如今花柳寬。菩薩莫嫌此輕贈。爲救施
 者世間難。

答

弘法大師

方袍苦行雲山裏。風雪無情春夜寒。五綴持錫觀妙法。六年羅衣吸
 蔬飧。日與月與丹誠盡。覆盆今見堯日寬。諸佛威護一子愛。何須惆
 悵人間難。

讚詞

中納言 大江匡房

偉哉大聖兜率降神、爰自_ニ韶亂匪直也人、乘_レ桴浮海越境問津、甘露弘法、大日施仁、三杵示兆、五筆留眞、四王執蓋、萬乘禮塵、乾臨之閣帝居之隣、早天飛雨、龍降水濱、他鄉月夜、高野華春、初證三地、後遺全身、入_ニ金剛定、昇_ニ摩尼輪、民受其賜、奈何大鈞。

同

本覺國師 虎

關

有_ニ非常之志、建_ニ非常之事、不是強爲_テ天機之所使也、纔見_ニ登壇具戒、則能對_レ佛、立誓是天機之所使、與_レ故諭鯨波之嶮危、得_ニ龍樹之深祕、故國山川雲行雨施、若夫宮中之紺宇、建_ニ護國之儀、頂上寶冠、證_ニ成佛之義者、又非_ニ天機之所及而已、昔飲光尊者、正_ニ受鷄足、千歲之下、少_レ有_ニ人繼_レ瞻_レ彼_レ南山、壽室有_レ恤、疑是同一、三昧乎、唯其缺_ニ金欄伽梨

之爲_レ異耳矣。

同

大學頭 林 信 充

雲晴高野山顏美、八相莊嚴月色多、空海非_レ空容_ニ萬物、密藏最密貯_ニ森羅、佛方能論過現未、倭字曾教以呂波、九百年（此詩大師九百年忌之詩故云爾）來宗派及、同塵垂跡德光。

同

泊如僧 正

發光之聖扶桑示蹤、跨_レ滄海險傳_ニ最上、宗國界遵_レ化法流洶々、群敵舉_レ旗機辨折衝、帝闕現_レ佛神泉降龍、絕_レ膳過夏披_レ葛歷冬、五筆偃_ニ韭三鉞名松、期_ニ龍華曉_ニ正_ニ受南峰。

高野大師

虎

關

聖賢應_レ世數元存、南海生_レ緣南印瀛、頂上寶冠即身佛、諸佛自_レ是豎_ニ降幡。

東寺憶空海

成海 九鬼隆一

空海曠世傑、豈謂柔門英、偉業神所避、千秋使人驚、東寺修法地、莊嚴仰遺靈、肅然醒心耳、落日疎磬聲。

弘法大師詠德俗謠十番

(節は豊國踊歌に同じ)

- 一、寶龜五年の夏六月の望の日生れし人は誰れ
- 二、御歳七ツで衆生の爲めに身を捨て誓ひし人は誰れ
- 三、桓武の御時入唐なされ眞言開きし人は誰れ
- 四、鎮護國家の御寺を建て、御修法創めし人は誰れ
- 五、人も住まない高野の山を開き給ひし人は誰れ
- 六、神泉苑に雨請なされ早魃救ひし人は誰れ

- 七、國の文花を開かん爲めにいろは作りし人は誰れ
- 八、清凉殿に宗論なされ諸宗なびけし人は誰れ
- 九、平城嵯峨と淳和の帝仰いで師とせし人は誰れ
- 十、承和二年の春三月に入定なされし人は誰れ

明治卅一年六月十日印刷
同年六月十五日發行

(非賣品)

編輯者兼

香川縣平民

石堂慧猛

京都市下京區梅小路柳筒町八條町八十五番戶寄留

印刷者

林虎之助

京都市上京區二條通高倉東へ入ル觀音町一番戶

發行所

傳燈會

京都市下京區八條町第八十五番戶

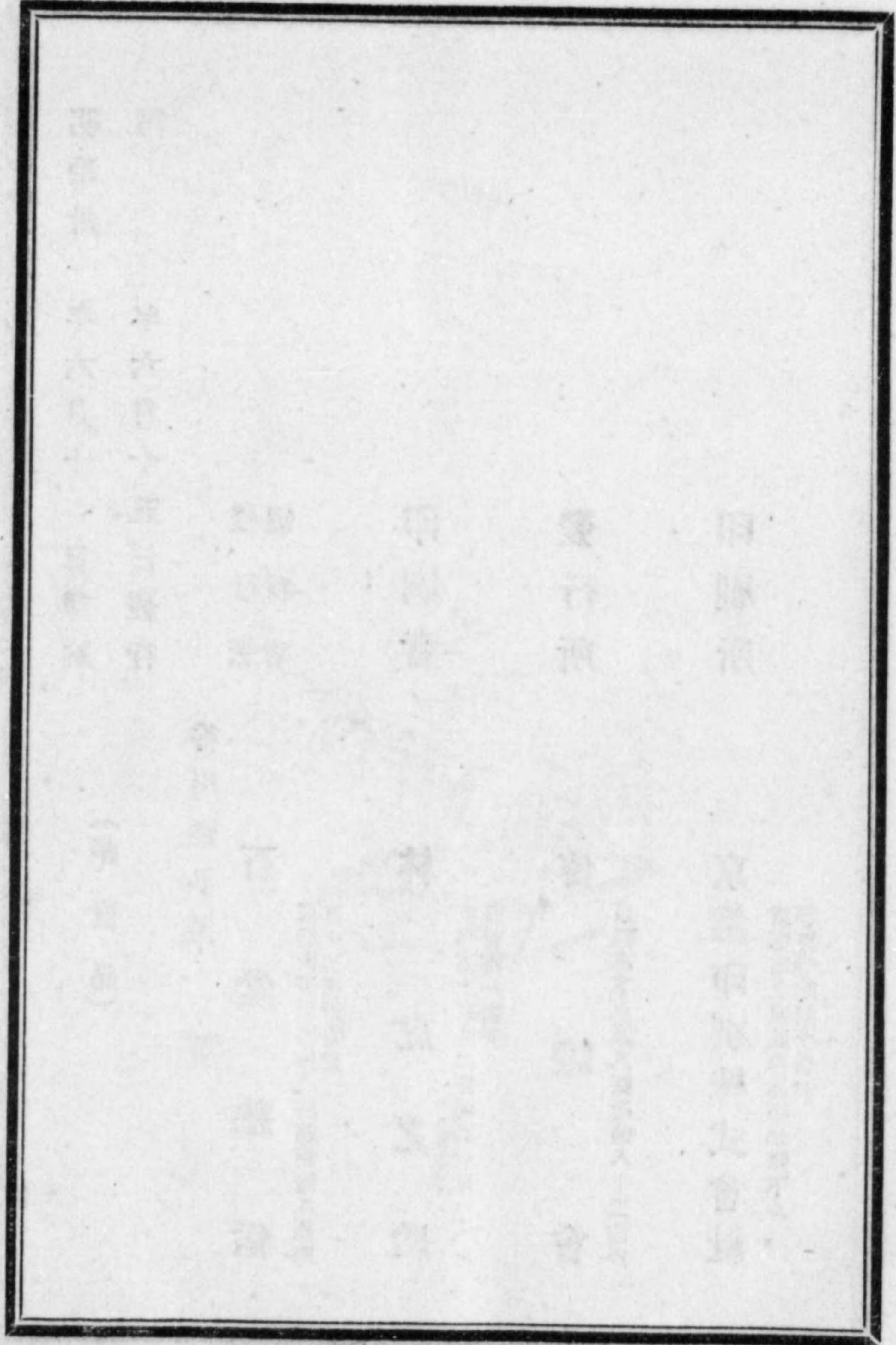
印刷所

京都印刷株式會社

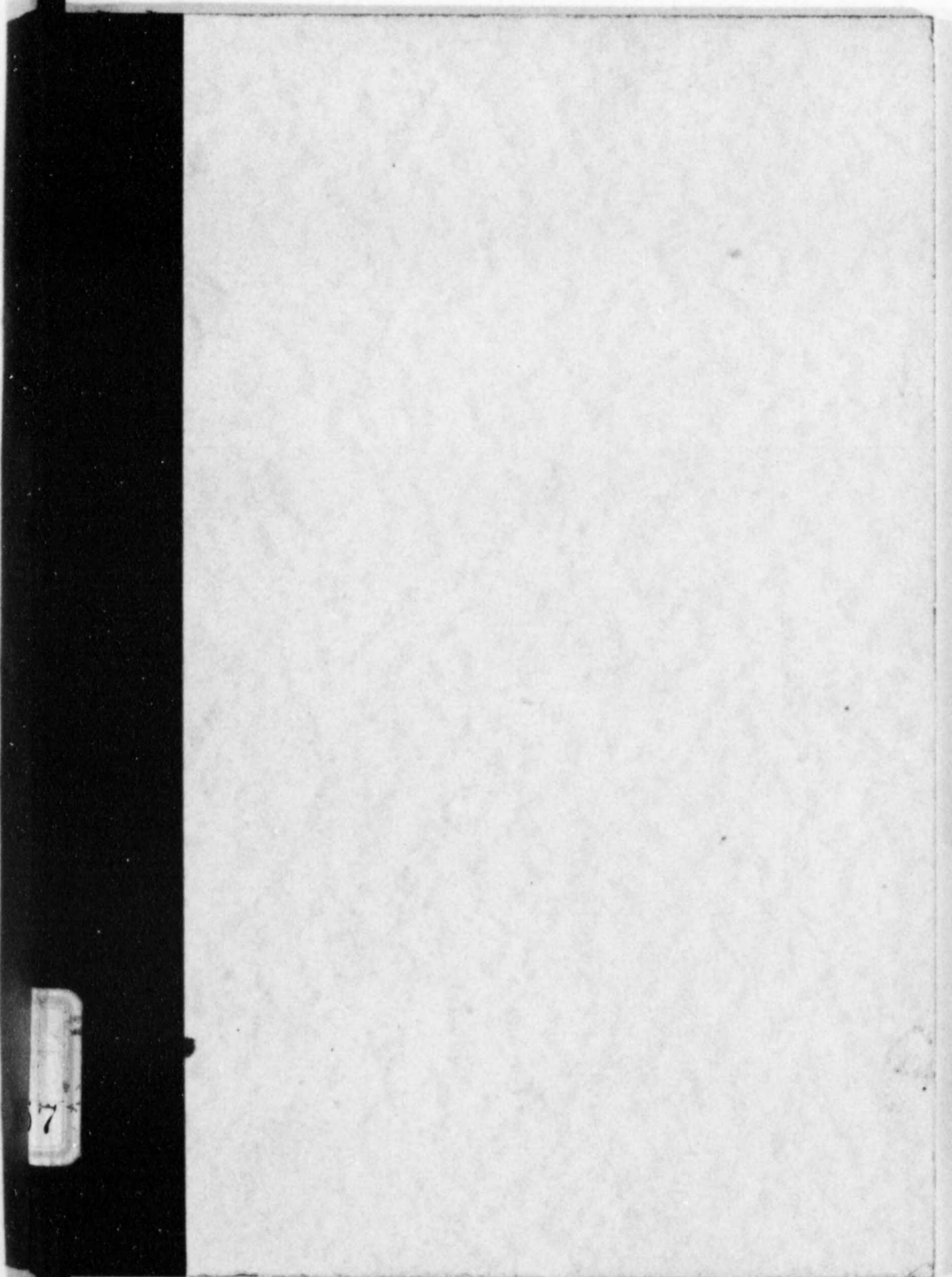
京都市上京區柳馬場二條下ル等持寺町第十番戶



E-62.







7

弘法大師

国立国会図書館

016882-000-9

特47-857

弘法大師

藤岡 勝二/著

M31.6

ABE-0100



特4

8

